

知り合いのかりゅうどにさそわれて、わたしは、イノシシがりに出かけました。イノシシが

りの人々は、みな栗野岳のふもとの、大造じいさんの家に集まりました。じいさんは、七十二さいだというのに、こしひとつ曲がついていない、元気な老かりゅうどでした。そして、かりゅうどのだれもがそうであるように、なかなか話し上手の人でした。血管のふくれたが

んじょうな手を、いろいろのたき火にかざしながら、それからそれと、愉快なかりの話をしてくれました。その話の中に、

今から三十五、六年も前、まだ栗野岳のふもとのぬま地に、ガンがさかんに来たころの、ガンの話もありました。わたしは、その折の話を土台として、この物語を書いてみました。

さあ、大きな丸太がパチパチと燃え上がり、しょうじには自在かぎとなべのかげがうつり、すがすがしい木のおいのするけむりの立ちこめている、山家のろばたを想像しながら、この物語をお読みください。

今年も、残雪は、ガンの群れを率いて、ぬま地にやって来ました。

残雪というのは、一羽のガンにつけられた名前です。左右のつばさに一か所ずつ、真っ白な交じり毛をもっていたので、かりゅうどたちからそうよばれていました。

残雪は、このぬま地に集まるガンの頭領らしい、なかなかりこうなやつで、仲間がえをあさっている間も、油断なく気を配っていて、りようじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけませんでした。

大造じいさんは、このぬま地をかり場にしていたが、いつごろからか、この残雪が来るようになってから、一羽のガンも手に入れることができなくな

ったので、いまいまいしく思っていました。そこで、残雪がやって来た

と知ると、大造じいさんは、今年こそはと、かねて考えておいた特別な方法に取りかかりました。それは、いつもガンのえをあ

さる辺り一面にくいを打ちこんで、タニシを付けたウナギつりばりを、たたみ糸で結び付けておくことでした。じいさんは、一晩中かかって、たくさん

のウナギつりばりをしかけておきました。今度は、なんだかうまくいきそうな気がしてなりました。

ばりをしかけておいた辺りに、何かバタバタしているものが見えました。「しめたぞ。」

じいさんはつぶやきながら、夢中でかけつけました。「ほほう、これはすばらしい。」

じいさんは、思わず子どものように声を上げて喜びました。一羽だけであつたが、生きて

いるガンがうまく手に入ったので、じいさんはうれしく思いました。さかんにばたついたとみえて、

辺り一面に羽が飛び散っていました。ガンの群れは、これに危険を感じてえさ場を変えたらしく、

付近には一羽も見えませんでした。しかし、大造じいさんは、たかが鳥のことだ、一晩たて

ば、またわすれてやって来るにちがいないと考えて、昨日よりも、もっとたくさん

の羽もはりにかかっていません。いったい、どうしたというのでしょうか。気をつけて見ると、つりばりの糸が、みなびいんと引きのば

されています。ガンは、昨日の失敗にこりて、えをすぐには飲みこまないで、

まず、くちばしの先にくわえて、ぐうと引つ張ってみてから、異状なしとみとめると、初め

で飲みこんだものらしいのです。これも、あの残雪が、仲間を指導してやったにちがいない

りません。「ううむ。」大造じいさんは、思わず感嘆の声をもらしてしまいました。

ガンとかカモとかいう鳥は、鳥類の中で、あまりりこうな

ほうではないといわれていますが、どうしてなかなか、あの小さい頭の中に、たいしたちえ

をもっているものだなということとを、今さらのように感じたのでありました。

その翌日、昨日と同じ時刻に、大造じいさんは出かけていきました。

秋の日が、美しくかがやいていました。じいさんがぬま地にすがたを現すと、大きな羽音とともに、

ガンの大群が飛び立ちました。じいさんは、「はてな。」と首をかしげました。

つりばりをしかけておいた辺りで、確かに、ガンがえをあさ

った形跡があるのに、今日は一

羽もはりにかかっていません。いったい、どうしたというのでしょうか。気をつけて見ると、つりばりの糸が、みなびいんと引きのば

されています。ガンは、昨日の失敗にこりて、えをすぐには飲みこまないで、

まず、くちばしの先にくわえて、ぐうと引つ張ってみてから、異状なしとみとめると、初め

で飲みこんだものらしいのです。これも、あの残雪が、仲間を指導してやったにちがいない

りません。「ううむ。」大造じいさんは、思わず感嘆の声をもらしてしまいました。

ガンとかカモとかいう鳥は、鳥類の中で、あまりりこうなほうではないといわれてい

ますが、どうしてなかなか、あの小さい頭の中に、たいしたちえをもっているもの

このガンは、二年前、じいさんがつりばりの計略で生けどったものだったのです。今では、すっかりじいさんになつていました。ときどき、鳥小屋から運動のために外に出してやるが、ヒュー、ヒュー、ヒューと口笛をふけば、どこにいてもじいさんのところに帰ってきて、そのかた先に止まるほどになれていました。

大造じいさんは、ガンがどんぶりからえを食べているのを、じっと見つめながら、「今年は一とつ、これを使ってみるかな。」

と、独り言を言いました。

じいさんは、長年の経験で、ガンは、いちばん最初に飛び立ったものの後について飛ぶ、ということを知っていたので、このガンを手に入れたときから、ひとつ、これをおとりに使って、残雪の仲間をとらえてやろうと考えていたのです。

さて、いよいよ残雪の一群が今年もやって来たと聞いて、大造じいさんは、ぬま地へ出かけていきました。

ガンたちは、昨年じいさんが小屋がけた所から、たまのどくきよりの三倍もはなれている地点を、えさ場にしていうでした。そこは、夏の出水で大きな水たまりができて、ガンのえが十分にあるらしかったのです。

「うまくいくぞ。」

大造じいさんは、青くすんだ空を見上げながら、につこりしました。

その夜のうちに、飼いならしたガンを例のえさ場に放ち、昨年建てた小屋の中にもぐりこんで、ガンの群れを待つことにしました。

「さあ、いよいよ戦闘開始だ。」

東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。

残雪は、いつものように群れの先頭に立って、美しい朝の空を、真一文字に横切ってやって来ました。

やがて、えさ場に下りると、グワア、グワアというやかましい声で鳴き始めました。大造

じいさんのおねは、わくわくしてきました。しばらく目をつぶって、心の落ち着くのを待ちました。そして、冷え冷えするじゅうしんをぎゅつとにぎりしめました。

じいさんは目を開きました。

「さあ、今日こそ、あの残雪めにひとあわふかせてやるぞ。」

くちびるを二、三回静かにぬらしました。そして、あのおとりを飛び立たせるために口笛をふこうと、くちびるをとんがらせました。と、そのとき、ものすごい羽音とともに、ガンの群れが一度にバタバタと飛び立ちました。

「どうしたことだ。」

じいさんは、小屋の外にはい出してみました。

ガンの群れを目がけて、白い雲の辺りから、何か一直線に落ちてきました。

「ハヤブサだ。」

ガンの群れは、残雪に導かれて、実にすばやい動作で、ハヤブサの目をくらましながら飛び去っていきます。

「あつ。」

一羽、飛びおくれたのがいます。

大造じいさんのおとりのガンです。長い間飼いならされていたので、野鳥としての本能がにぶっていたのでした。

ハヤブサは、その一羽を見のがしませんでした。

じいさんは、ピュ、ピュ、ピュと口笛をふきました。

こんな命がけの場合でも、飼主のよび声を聞き分けたとみえて、ガンは、こっちに方向を変えました。

ハヤブサは、その道をさえぎって、パーンと一けりけりしました。

ぱつと、白い羽毛が、あかつきの空に光って散りました。ガンの体はななめにかたむきました。

もう一けりと、ハヤブサがこうげきの姿勢をとったとき、さつと、大きなかげが空を横切りました。

残雪です。

大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました。が、なんと思っただ、

再びじゅうを下ろしてしまいました。

残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、

救わねばならぬ仲間のすがたがあるだけでした。

いきなり、てきにぶつかっていききました。そして、あの大きな羽で、力いっぱい相手をなぐりつけました。

不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよろめきました。が、ハヤブサも、さるものです。さつと体勢を整えると、残雪のおな元に飛びこみました。

ぱつ

ぱつ

羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。

そのまま、ハヤブサと残雪は、もつれ合って、ぬま地に落ちていきました。

大造じいさんはかけつけました。

二羽の鳥は、なおも地上ではげしく戦っていました。が、ハヤブサは、人間のすがたをみとめると、急に戦いをやめて、よろめきながら飛び去っていききました。

残雪は、おねの辺りをくれないにそめて、ぐったりとしていました。しかし、第二のおそろしいてきが近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、

ぐっと長い首を持ち上げました。そして、じいさんを正面か

らにらみつけました。

それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようでありました。

大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もうじたばたさわぎませんでした。それは、最期の時を感じて、せめて頭領としてのいげんをきずつけまいと努力しているようでもありました。

大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対しては、ような気がしませんでした。

4

残雪は、大造じいさんのおりの中で、一冬をこしました。春になると、そのおねのきずも治り、体力も元のようにになりました。

ある晴れた春の朝でした。

じいさんは、おりのふたをいっぱいに開けてやりました。

残雪は、あの長い首をかたおけて、とつぜんに広がった世界におどろいたようでありました。が、

バシッ。

快い羽音一番、一直線に空へ飛び上がりました。

らんまんとさいたスモモの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。

「おうい、ガンの英雄よ。おまえみたいならぶつを、おれは、

ひきようなやり方でやつたかあないぞ。なあ、おい。今年の冬も、仲間を連れてぬま地にやって来いよ。そうして、おれたちは、また堂々と戦おうじゃあないか。」

大造じいさんは、花の下に立って、こう大きな声でガンによびかけました。そうして、残雪が北へ北へと飛び去っていくのを、晴れ晴れとした顔つきで見守っていました。

いつまでも、いつまでも、見守っていました。